∞∞∞　∞∞∞∞∞∞　∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞　∞∞∞∞∞∞　∞∞∞∞　∞∞∞∞∞∞∞　∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞　∞∞∞∞∞∞∞　∞∞∞

クスクスの木(き)の物語(ものがたり)

Ⅰ

被爆者(ひばくしゃ)がひきうけた白(しろ)い涙(なみだ)への賛歌(さんか)　～平和(へいわ)への指標(しひょう)～

∞∞∞　∞∞∞∞∞∞　∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞　∞∞∞∞∞∞∞　∞∞∞∞　∞∞∞∞∞∞∞　∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞　∞∞∞∞∞∞∞　∞∞∞

作：ひの　めぐみ

08A8

©ひのめぐみ

あらすじ:

第二次大戦の終戦直前、陽子は長崎に住む十八才の娘でした。つつましやかに暮らす白水家はキリシタン村にあり、陽子は八人兄弟姉妹の末娘でした。そこは後に原爆直下の地となりますが、陽子は奇跡的に生き残ります。しかしひどい火傷と被爆の後遺症、社会的に受ける精神的苦痛から心身ともに病み、本来の明るさを失っていきます。あらゆるものを失い、内向きの生き方をつづけ、自虐的な思いにむしばまれつつ、陽子は年輪を経ていきます。古い社会通念に支配されて生きた時期も長くありましたが、ぎりぎりまで自分を追いつめた状態ともちまえの探求心が自然界への洞察力を深めさせていったのか、陽子の長年の問いかけに答えが得られるときがやってきました。それは一度に来たわけではありませんが、前進してはまた後退するような繰り返しのなかで、ようやく素直にありのままの自分と同一化することができた日、陽子は積もり積もった内なる葛藤を知らぬまに乗り越え、自分の生き様をとり戻していくのでした。

登場人物:

陽子:　白水　陽子/ 大山　陽子。昭和元年•大正15年（1926 年）8月8日、朔（新月）の生まれ。
白水家の四女。姉や兄から可愛がられて育ち、園子と相性がよかった。
もともと陽気な性格。一度決めたことは守り抜く強さもある。徳治の妻。
（陽子:19 才~47 才の陽子。若い陽子:20 代の陽子。老女陽子:79 才-89 才の陽子）

母　:　陽子の母（白水　トキ）　46才で被爆死。家族を大切にする日本の母親。家訓の「大調和」を守り日々精進していた。長崎の人。

長女:　トヨ。28才で被爆死。針仕事や料理が得意で母親代わり。大人しくしっかり者。

次女:　園子。26才で被爆死。愛想がよく小さい子の面倒見よく、陽子を可愛がる。

三女:　広子。23才で被爆死。お転婆で快活、頭脳明晰。皆を笑わせる楽しい性格。

徳治:　大山　徳治。昭和元年•大正 15 年（1926 年）7 月7日生まれ。陽子の幼馴染であり夫。
終戦時にはキリシタンだった両親とも既に他界している。繊細、ひ弱で気がやさしい。

叔母:　さつきおばちゃん。陽子の父、健之助の一歳違いの妹。陽子の叔母。
昭和 20 年（1945 年）8 月 9 日時点で 49才。未亡人。5 月5日生まれ。陽子の実家の近所に住み、原爆投下後、唯一徳治と陽子の動向を知る人。自身も被爆していたが、最後に陽子に会ってからの消息は不明。

主人2:　黒川温泉宿の主人。二代目。先代の主人の娘の夫。先代が亡くなった後、宿を継ぐ。

ボランティア:　智　（日本の学生）　陽子とクスクスの木を探しに行く

©ひのめぐみ

ボランティア:　ルナ（米国から来た学生）　陽子とクスクスの木を探しに行く

ボランティア:　日本の学生
ボランティア:　豪州から来た学生
ボランティア:　インドネシアから来た学生
ボランティア:　フィリピンから来た学生
介護士さん
主任さん
人々・人
月の精
月の光の精たち
クスノキの精（たち）
花の精（たち）
水の精（たち）
風の精（たち）
土の精（たち）
鳥（たち）:　主にハト
蝶（たち）:　主にモンシロチョウ、モンキチョウ
みつ蜂（たち）

先代の主人:　黒川温泉宿の主人。叔母さつきの遠縁。寛大で気前がよい人。
陽子の父:　白水　健之助。昭和19年（1944 年）享年49才ビルマ（現ミャンマー）で戦死。
親がキリシタンだったが家の信教については自由という考え。家訓は「大調和」。
長男: 白水　健一。昭和 19 年 26 才長崎で爆死。
次男:　白水　健二。昭和 17 年 21 才ソロモン諸島で戦死。
三男:　白水　健三。昭和 19 年 20 才ビルマで戦死。
四男:　白水　健四郎。昭和 19 年 16 才、動員学徒として作業中に爆撃を受け死亡。
ウメ:　陽子の父、健之助の母。福岡県の久留米絣問屋の娘だった。17才で健之助を産む。

＊ 長崎の話ですが、分かりやすさを基準に、標準語ベースで書かれています
＊ 上記「登場人物」に示す年齢は満年齢です

©ひのめぐみ

目次(もくじ)

第1章(だいしょう)　バス停(てい)の木(き)

第2章　祝言(しゅうげん)の日(ひ)

第3章　その日(ひ)

第4章　川(かわ)

第5章　木(き)

第6章　人格喪失(じんかくそうしつ)

第7章　解雇(かいこ)

第8章　再会(さいかい)

第9章　自然(しぜん)

第10章　邂逅(かいこう)

第11章　七十回目(ななじゅっかいめ)のこの日(ひ)

第12章　お月(つき)さま

第13章　有明月(ありあけのつき)

©ひのめぐみ

第1章　バス停の木

長崎市。夏。
雨雲が去ると黒光りしながら現れる青空。
立ち並ぶビルの窓に反射する太陽光。南中を過ぎた光。
街路樹にこんもりと茂る葉。中で大合唱する蝉の声。
アスファルトの道路から立ち上る湯気。
それを蹴散らすように行きかう車両。

通り過ぎた車の向こう側に見えるのは、バス停とベンチ。そしてその傍らに立つクスノキ。片側の大枝を二本切り取られながらも反対側の枝をベンチに伸ばし、そこに座る人のために木陰を作ろうとしているかのようです。その幹の下側にはさるのこしかけのようなキノコ状の広がりが見えています。

平成22年、西暦2010年の8月9日。65回目の夏。毎年行なわれる原爆被災者の追悼式を終え、昨日数え歳八十五になった陽子がこのクスノキのところへやってきました。黒い喪服姿に使い古した日よけ帽子をかぶり、地味な雨傘を差し、時間を気にせぬ足どりでバス停のベンチに辿り着くと、木を見上げました。それは「クスクスの木」とか「クスクスさん」と小さいころから呼び親しんできた木でした。木の幹のキノコを見つけると珍しそうに見入り、それからゆっくりとベンチに腰を下ろし、日傘を畳むとクスノキの木陰におさまりました。一息ついた陽子は、ようやくあたりを眺めまわします。

「あたりまえ　あたりまえのよう　この景色　毎年の祈り　クスクスの木と

何度目の　八月九日　ここにあり　あなたの命も　精一杯

見つけたの　広がるきのこ　クスクスさん　誰にも内緒　立っててておくれ

思いだす　勇気を得るまで　永遠の砂　心の「蔵」に　恐れの綴り

若人に　伝えたいこの　あたりまえ　悩めることも　しあわせのうち

ただそこに　あなたがいること　の　しあわせ　鍵を差しこむ　勇気を得た今

わが扉　あなたに向けて　開きましょう　さあ語りましょう　クスクスの木と」

昭和20年、西暦1945年8月のはじめ、第二次大戦中。後に長崎の爆心地として知られる村がありました。陽子もそこに白水家の八人兄弟姉妹の四女として生まれた弱冠十八才の娘でした。父と二人の兄弟はアジアの戦地で兵役中、夫々が終戦の一年前までに戦死しま

©ひのめぐみ

した。一番下の弟は動員学徒として軍需工場で勤労作業中に受けた爆撃がもとで亡くなりました。長男も長崎の軍需工場で爆死しました。三人の姉はすでに嫁いでいましたが、どの家にも夫は不在でした。陽子と幼馴染の徳治という若者もこの村で育ちました。しかし徳治も一か月前の七夕には十九才になり、まもなくの出征が決まったところでした。このため二人は急きょ祝言をあげることになりました。陽子も一週間後の８月８日には十九才です。当時は二人ともすでに二十歳とみなされていました。母親のお腹の中にいる時からすでに命が生まれていると考え、誕生時には「数え歳」で一歳と考えられていたからです。

第２章　祝言の日

午前中、西の空に薄く残る有明月。陽子の家の縁側から、三人の姉と母トキ、叔母のさつきが祝言の用意にいそがしくしているのが見えます。

昭和20年８月１日。陽子の三人の姉、長女トヨ、次女園子、三女広子は前日から実家に泊まり込み、乏しい物資のなかでもどうにか祝言らしく整えようと色々工夫して準備をしていました。戦局が激しくなったこの頃は配給の物資も不足し、お米のご飯を食べられる日も無くなっていきました。子供も大人も空腹をかかえたまま勤労奉仕をし、女性は質素なもんぺ姿で生活していました。しかしこの日はハレの日だからと、打掛けまでは用意できなかったものの、次女園子が、なけなしの着物の中から一番上等なものを持参し、陽子に羽織らせたのでした。三々九度の盃に注ぐお神酒は、陽子がさつきおばちゃんと慕う叔母が調達してくれたものでした。男手の無いなか、近所に住むこの叔母と母トキが仲人役を務め、陽子と徳治の結婚の儀をひそやかに執り行ないました。

着物姿で座っている陽子のところに、軍服姿で徳治が現れ、長女トヨが二人を祝福しました。

「おめでとうございます、徳治さん、陽子」

続いて、次女園子や三女広子からも声があがります。

「おめでとう！」「おめでとう！」

さつきおばちゃんも二人にお祝いの言葉をかけました。

「この度はおめでとうございます、徳治さん、陽子ちゃん」

徳治がそれに答えます。

「ありがとうございます、さつきおばちゃん、トヨさん、園子さんも、広子さんも」

すると母が陽子に言いきかせます。

「よく徳治さんにおつかえするのだよ、陽子」

陽子が慣れない着物の中で固くなりながら口ごもります。

「...はい。かあちゃん...あ、かあさん」

母が困ったように、徳治に向かって言います。

「徳治さん、まだ何もできないこんな娘ですが、どうぞよろしく...お願い申します...」

最後のほうの母の言葉は、涙声で詰まっていました。

©ひのめぐみ

「はい、お義母さん。自分はまもなく出征する身であります。このような自分に大切なお嬢さんを、陽子さんを妻として迎えさせて頂くことは、誠にかたじけなく思うところであります」

皆、一瞬シンとしましたが、まもなく陽子が母の前に進み出て、歌いだしました。平穏だった時、家族や近所で集まっては、よく一緒に即興で歌ったことを思い出したのです。

「かあさん、今日はお伝え申します。これまでどうもありがとうございました」

徳治も即興で呼応しました。

「お義母さん」

陽子がさらに歌を続けます。

「かあちゃん、あ、かあさん、今日までの　その御恩は　決して、決して...」

徳治と陽子が、毎日みんなで歌を歌えた日々を思い出しながら伝えます。

「これまでの　御恩は決して　わすれません。

　育てて頂き　ありがとう　ございます」

母と叔母が目頭をおさえました。

広子も歌いだしました。

「何もない　なんにもないけど　祝いましょう。

　差し出した　銅もハガネも　差し出した」

トヨは大切そうな何かを胸に抱えながら陽子に近づきました。

「何もない　なんにもないけど　その昔　メリケン人形　交換したの」

トヨは「しーっ」という仕草をしながら人形を渡しました。陽子はびっくりしながらも大事そうにそれを受けとり、眺めてからトヨに笑いかけました。

叔母さつきは陽子に手縫いの割烹着を渡しながら歌を継ぎます。

「何もない　なんにもないけど　縫ってみた　真っ白無垢なる　割烹着」

陽子はそれを受け取り、前身ごろに合わせるとにっこりします。

園子が続けます。

「何もない　なんにもないけど　思い出は　陽子の笑顔　とびきり笑顔」

徳治が陽子の手をとります。

「何もない　なんにもないけど　心あれ　心通えば　百人力さ」

母は娘たちの姿をいとおしそうに見やりながら徳治に声をかけます。

「ありがたや　ああ、ありがたや　ありがたや　今日の日もまた　思い出になろう

うちの宝じゃ　思い出は」

広子が思い出すように声をあげます。

「父さんも　兄ちゃんたちも　国の為　健一、健二　　旅だったんだ」

母も夫や息子に思いをはせます。

「いずこにて　お役目果たし　逝かれたか　父さん、健三　健四郎まで」

叔母さつきも天に向かって呼びかけます。

「見て下され　この子の姿　見て下され　祝言の日の　晴れの姿を」

©ひのめぐみ

広子が歌を止め、叫びます。

「ここにいて！　いるだけでいい　父ちゃん兄ちゃん。

立派なお役目？　いらないわ！　いらないわったら　いらないわ！」

母がこれを諌めました。

「これ、言葉を慎みなさい。父さんや兄さんがたはもう、お国に仕えお役目を果たされた英霊なのですよ。このような日に！」

「…ごめんなさい、かあさん」広子が謝りました。

第 3 章　その日

午前中。空襲警報が鳴りやむと、一瞬シンとしていた蝉たちの声がワッと合唱を再開しました。何を伝えようとしているのか、畦のそこかしこからは負けじと叫ぶカエルの声。山の端をわたる綿雲、時々見え隠れする青空。縁側の向こうには防空壕の入り口。湿った８月の空気が胸騒ぎを伝え、壁の柱時計は刻々と迫りくるその時にむかって針を進めていました。

「人はいう　天罰がきた　マリアさま　その血の涙は　たが手がすくうか

罪深き　人という名を　背負わされ　呪文の牢獄　つながれし鎖

人はいう　この世の終わり　観音様　御慈悲の衣の　裾にすがらむ

内を観よ　神の光は　いずこより　照らされたもうか　幼子たちを」

「広島に新型爆弾が落とされて町が消えたんだと」そう聞かされても、陽子たちにはそれがどんなものなのか想像もつきませんでした。陽子の家にはテレビもなく、ラジオが割れた音声で国民を鼓舞していました。昭和 20 年になると空襲が激しさを増し、夜、連合軍の米軍機が低空飛行で爆音をたてて民家の上を通り過ぎては、漆黒の闇の中に恐怖と不安を残して飛び去りました。たてつけの悪い木造の家はＢ２９の轟音による振動だけで十分震え、布団の中に丸まっている陽子のはらわたにまで鈍く重い振動を残していくのでした。東京もやられたらしい。沖縄もやられたらしい。九州の町も次々とやられていました。自分たちの村もいつ焼夷弾が落とされるか、焼かれてしまうか分からない。不安におののく陽子たちは寝不足の日々を送っていました。中等学校に通う者は動員学徒として軍需工場で働き、お国のために尽くしました。生徒は、なぎなたや竹槍一本で敵と戦い身を守る訓練をしました。物資の困窮は目に見えて進み、既に家じゅうの貴金属は兵器製造の為として没収されていきました。そんな中、長女トヨが隠して大切にしていたのが米国製のセルロイド人形でした。戦前の尋常小学校で米国の学校と、それぞれの国の人形を交換して送り

©ひのめぐみ

合ったことがあったのです。トヨが陽子に贈ったのはそのときの人形でした。

昭和20 年 8 月 9 日。午前10時半。陽子は縁側でリュックに備蓄品を詰めていました。叔母さつきからもらった白い割烹着を身につけた陽子は、長女からもらった人形を眺めると、それもリュックにしまい込みました。実家に集まっていた姉たちは、干した洗濯物を畳んだり、さつま芋を麻袋に詰めたり、粗末ながらも昼食の用意を始めていました。

気持ちをほぐそうと、陽子はいつもの癖で歌いだしました。
「青い目の　ぱちくり人形　くれた人　どこでどうして　いらっしゃるのか」
トヨも、手はてきぱきと仕事をしながら応えて歌います。
「気をつけて　敵国のもの　隠し持ち　非国民かと　騒ぐ輩に」
すると陽子が問いかけます。
「敵はだれ？　人形くれた　人も敵？　敵はだれ？　人形くれた　国も敵？」
母が陽子や姉たちの視線に応えるように伝えます。
「敵はだれ？　ほんとの敵は　人じゃない　敵はだれ？　ほんとの敵は　国じゃない」
こんどは園子が問いかけます。
「争いは　争いは何故　始まるの？　争えば　何故怒り出し　憎み合う？」
母が続けます。
「争いは？　黒き思いを　食うやから　争いは？　心のなかに　潜む種」
その時、広子が声をあげました。
「人殺し！　兵器も軍も　大っ嫌い！　人殺し！　爆弾に銃　大っ嫌い！」
母が歌をおさめるように応えました。
「人殺し？　みんなどこかの　母の子よ　人殺し？　みんなどこかの　母の子よ。」

そして母は陽子に荷物の詰まったリュックを差し出しました。
「陽子、先にこれらを防空壕に運んでおいてちょうだい」
「はい」
陽子は荷物をかついで防空壕に向かい、姉妹と母はお昼のしたくをするために縁側から家の中に入りました。

11時、その準備が行われていました。
11 時 1 分すぎ、それは手動で投下されました。
11 時 2分、それは炸裂しました。

－　閃光　－
－　沈黙　－
－　地響を超えた地響　－
－　爆風を超えた爆風　－

©ひのめぐみ

浦上地区、高度5~600 メーターほどでもう一つの原子爆弾が炸裂しました。それは村の上空のとても低い位置であったため、核爆弾の破壊力の影響はすさまじいものになりました。広島にナチスのウラン型爆弾が落とされた三日後、長崎の一般市民の頭上に落とされたのは米国が開発したプルトニウム型爆弾でした。実際の戦争で使用されてしまった核兵器、その最初の二つが日本に落とされたのです。そしてこれが最後の二つとされなければなりません。核エネルギーを研究することと、実際に兵器として戦争で使ってしまうことは大きく違います。たとえば鉄は 1600 度ではすでに溶け、3000 度ではすでに沸騰しているものです。爆心地はどんな状態になったでしょうか。その地表温度は 4000度を超えました。そして長崎の人口およそ 24 万人中、死傷者は 15万人を超えたのでした。このほか罹災者やその後発症した病気による患者、二次被害者を入れるとその数は、はかり知れません。それはいかなる名目であろうとも人類が人類に対して使用してはならない、無差別殺人兵器であったのです。

陽子は防空壕の奥にすさまじい爆風で吹き飛ばされ壁に叩きつけられて、しばらく気絶していたものの、奇跡的に一命をとりとめました。まもなく気づいた陽子は起き上がると、暗闇の中を手探りで外に這いだしました。

第 4 章　川

防空壕から出て、下の川に向かう道を、裸足で彷徨う陽子。割烹着は陽子を守るために自らがボロボロになったかのようでした。薄暗い世界。あちらこちらからあがる火の手。

「あ….　あ…　ここはどこ？
建物もない　木もない
立つものの　けはいの無い　世界
くずおれ　溶け　黒焦げ

さっきまで一緒だった　手が
さっきまで握っていた　鉄が
さっきまで感じていた　息が
焼けつくされた　世界。　　わたしは　生きているの？
生きているのは　　わたしだけなの？」

陽子はよろよろとして、つまずきそうになりました。
「砂のよう　くずれゆくかな　人の身も　人々を　乗り越え進む　我を許せよ。」

遠くからかすかに聞こえる人の声。

©ひのめぐみ

「水を水　ください水を　ひと口でも…」

声に気づき、陽子は歩く人の流れを見つけました。
「生きている　生きているんだ　この人も　あげるよ水を　ひと口でも
人がいた　まだ人がいた　この世界　川にいくなら　水がくめるよ」

人の声はよりはっきりと近くに聞こえてきました。
「水を水　ください水を　ひと口でも…」

ところが川の近くまで来て陽子は呆然としました。
「川に着き　息絶えるひと　数知れず　かの川はどこ　かの水はどこ
血の川と　被爆の水と　たれが知る　末期の水すら　いただけぬのか
かの川はどこ　かの水はどこ？
かの川はどこ　かの水はどこ？」

第5章　木

ふいに家を思い出した陽子はきびすを返し、本能的に自分の家があった方角に向かいました。
「帰ろうか　うちに帰ろう　道なき道
かあちゃんはどこ？　ねえちゃんはどこ？

ここはどこ？　家はぺちゃんこ　生木燃え
立てるものの　何もない場所

くずおれて　溶けだし黒焦げ　なにもかも
誰も知らない　暗黒の世界

さっきまで　一緒だったね　かあちゃんと
かあちゃんはどこ？　ねえちゃんはどこ？」

ふと立ち止まったところで、陽子は吹き飛んで捻じ曲がったバス停が転がっているのを見つけました。さらにそのむこうには幹の上半分が焼け落ちたクスノキが立っています。まだ火がくすぶっているのを、どうにかして消そうとしますが、水も布も無いので自分の手のひらでパンパンと火を押しとどめようとします。

「わたしは　いったい、生きているの？　もしかして、死んでいるの？　クスクスさん、

©ひのめぐみ

おまえ、生きてるのに、燃えちゃってるの？　幹も枝も吹っ飛んじゃって。穴があいて、真黒焦げだ」

その時、クスノキの精たちが陽子の問いかけに応えて現れました。命を絞り出すように陽子のよこで舞ってみせますが、陽子は気づきませんでした。

陽子の心がその時を語ります。

私はこの時まで自分も真黒焦げであることに気づきませんでした。私が目にしたほとんどすべてのものが、もとの形を失っていました。そしてこの一日で私は父、母、兄弟姉妹のすべてを失ったことを悟りました。大切なもののすべてが文字通り私の手から、砂となって崩れ去っていったのです。

第 6 章　人格喪失

8 月 9 日から一週間も経たないうちに終戦となりました。ところが多くの国民にとって終戦後には、いっそう辛い混乱の日々が待ち受けていたのでした。陽子も例外ではありませんでした。被爆の瞬間、陽子はひどい火傷を負いましたが、それに気づいたのは大きなショック状態が過ぎ去ってからでした。治癒に辛く長い日々を費やしたばかりか、被爆による複数の後遺症に苦しめられることにもなりました。しかし火傷や病気以上に陽子を苦しめたのは、被爆したという事実でした。陽子は怖い伝染病患者のように扱われ、働き口を探すのも引っ越し先を見つけるのも一苦労となっていきます。長崎に新型爆弾が落とされたことも公にはしばらく伏せられていました。当然のことながら当時はほとんどの科学者や医者でさえ、原子爆弾や原爆症に関する正しい認識など持ちあわせておらず、ましてや陽子には自分が何の病に何故冒されているかなど考えの及ばぬことでした。

陽子の心が語ります。

無学な私がさまざまなことを知るには長い時間がかかりました。人工的に作られた原子プルトニウムによる原子爆弾の実験が米国で行なわれてから一か月も経たないうちにそれが長崎に落とされていたこと、それらが多くの優秀な頭脳と人体実験によって実現化されていたこと、原爆投下前に日本はすでに当時のソ連に和平仲介を申し入れ戦争を終えようとしていたらしいことなど、公になった戦時中の出来事を私が知るには、その後何十年もの歳月を経る必要がございました。二種類の原子爆弾が起こし得る危険性と悲惨さが 1945 年に広島と長崎で証明されても、そこで核実験を終えることになったのではなく、むしろその後ますます多くの核実験が行われるようになってしまったことは驚きでございました。

二千回以上の実験、いいえ、間違って投下したり爆発させてしまったという偶発的事故を含めれば、そして公になっていない実験を含めるならば、その数いかばかりでしょうか。地上の実験が終わっても、地下の実験が続けられています。地球はその皮下に与えられる

©ひのめぐみ

激痛を、どれほどの回数我慢されてきたのだろうかと思えば、この美しい自然を与えてくださっている大地に、申し訳なさが募るのでございます。

一方、徳治は久留米で終戦をむかえました。この時多くの国民はラジオから天皇陛下の玉音を拝しました。昭和20 年 8 月 15 日のことでした。徳治も他の兵士にまじって直立不動の姿勢で、難解な言い回しの日本語がラジオの雑音の中から流れるのを聞いていました。意味を解さぬ者も多かったので、放送終了後、上官が敗戦を告げました。黙している者もあればむせび泣く者もありました。

その後、徳治の心は解き放たれた鳩のように故郷に向かいました。とはいえ鳥のように空を飛べぬ彼の足は、あちらこちらで爆破された鉄道の線路を伝って歩き続けました。ようやく混乱の波をくぐりぬけて長崎にたどり着いた彼がそこで見たものは、しかし、変わり果てた故郷の姿でした。驚いている間もなく、徳治は陽子とその家族の安否を確認すべく、心当たりをあちらこちら探し回りました。爆心地で過ごすということが後ほどどんな意味を持つことになるのか、当時の彼には知る由もありませんでした。

捻じ曲がって倒れているバス停と焼け焦げたクスノキを、徳治も見つけました。徳治はクスクスの木のそばで野宿し、生きているか死んでいるか分からない木に語りかけながら、陽子もここにきっと戻ってくるのではないかと考えるのでした。

「これが、我が故郷か。どの町も空襲でひどい有様だったが、いったいどうしたら大地はこのような姿になり得るのだろうか？クスクスさん、お前も大変な目にあっていたんだね」

徳治が語りかけると、クスノキの精たちが、それに応えるかのように徳治の傍らに現れました。そしてあるだけの力を振り絞って静かに舞ってみせますが、徳治は気づきませんでした。

終戦から4日目の夜、クスクスの木の近くで月明かりにぼうっと照らされている徳治を見つけたのは叔母のさつきでした。

「徳治さん、そこにいるのは徳治さんじゃないの！」

「さつきおばちゃん！」

「よく無事でいてくれたねぇ。ああ、有難い、有難い」

「おばちゃんもよく無事でしたね。陽子さんたちはどうしていますか？」

「陽子ちゃんは生きてるよ。助かったよ。大村の救護病院に運ばれたから、行っておやりなさい」

「わかりました。おばちゃん、ありがとうございます。あとの...」

「陽子ちゃんだけ、助かったよ」

「...分かりました」

「今すぐ行ってあげて」

「はい」

©ひのめぐみ

ようやく知り合いに巡り会えた安堵もつかの間、徳治は叔母さつきの話から、白水家の母も姉妹も助からず、生存しているのは陽子のみであることを知るのでした。それからすぐに徳治は大村の救護病院に駆けつけ、たくさんの焼けただれた人がところ狭しと床に直接横たえられているなかに、同じように焼けただれた自分の愛する人を見つけました。見たこともないほどに傷つけられたその身体は、どこにも触れることは許されぬように思われました。薬も治療法も無く、寝かされているだけの状態。しかし短く定期的に吐き出される息づかいは、彼女が生にむかって必死に闘っていることを伝えていました。浅い眠りであってもおそらくは、目ざめているときの苦痛から彼女をささやかに解放しているかもしれない。そう考えると徳治は陽子を起こしてしまわぬよう気をつけました。そして回復を祈り彼女への変わらぬ思いを送ると、静かにその場を離れるのでした。

徳治はその後、陽子が退院した後の生活を成り立たせるため、食いぶちを求めて山奥の工事現場に赴くことにしました。さつきに陽子のことを頼むと、徳治は長崎を離れました。

徳治が帰還し病院にも見舞いにきていたことを陽子が知ったのは、こん睡状態から覚めた後でした。しかし時遅く、徳治はすでに長崎を去っていたのでした。さつきは徳治が県外に出て行った訳や、どれほど陽子のことを思っていたかを伝えようとしましたが、知らぬ間の出来事を知った陽子はショックのあまり再び熱にうなされてしまいました。自分のもとを去ってしまった夫。焼けた肉体を床に横たえ生きる屍のようにそこにいるしかない自分。「どうしようもない、心と身体が張り裂けそうに痛いんです。生きているのは辛いことですね。誰に分かるというのでしょう。こんな私は人知れず消えてしまいたい。」そんな風に叫ぶ陽子の肉と心の格闘がさらに続いたのでした。

それから二年余りが過ぎましたが、徳治からは音信不通のままでした。さつきは自らも被爆していたにもかかわらず、数え五十二歳になる自分はもう十分生きたからといって、若い陽子に強く生きるよう励ましながら面倒をみるのでした。

時間は肉体の痛みも心の痛みも癒していくものですが、この時の陽子に、その時間の法則は当てはまりませんでした。毎晩悪夢にうなされ、癒えぬ心の傷口は広がっていくばかりでした。

老女陽子の心がこの時を語ります。

爆心地に居たにもかかわらず一命をとりとめた私とさつきおばちゃんでしたが、その特異さ故にGHQの目にとまり、特に若いほうの私は、放射線による障害の治療というよりは調査研究のための材料として定期的に運行されるようになりました。そこでは日本人の医者であっても対処の仕方は同様でした。陽子という人格は消され、追跡調査を受ける被爆実験の対象となる「物」のようにしか扱われなくなっていたのです。

©ひのめぐみ

昭和22年、1947年初冬、毎度の検査の苦痛におびえる私を見かねたさつきおばちゃんは、とうとう私に村から逃げるように言いました。

大晦日月の夜、クスクスの木のバス停前に、大きな風呂敷つづみを背負った叔母とリュックを背負った陽子の姿がありました。

陽子が不安げにつぶやきます。

「さつきおばちゃん...」

叔母が普段と同じ声で言いました。

「陽子ちゃん、あんたが生まれた日は朔だった。真っ暗な夜だったよ。あのピカドンの前のあんたの誕生日も朔だったねぇ。今夜も晦で真っ暗だ。夜逃げするにはちょうどいい。あんたは真っ暗な夜が似合う」

「さつきおばちゃん！」陽子は半泣きになって叔母に抗議するかのように言いました。

さつきはすぐに柔らかい諭すような声で伝えました。

「悪いことばかりじゃないよ。明日は朔。朔はこれからが始まりってこと。真っ暗になったら、少しずつ明るくなっていくしかないの」

半コートの袖で涙を振り払い、歪んだ口元を隠しながら陽子は平静を装っていました。

「いいかい、熊本の、黒川の温泉宿に行くんだよ。おばちゃんの遠縁にあたる人がやってる。気のいいおじさんだから大丈夫。この手紙を渡すんだよ。ちゃんとかくまってくれるはずだから」

「おばちゃん...」

叔母のさつきは自分の風呂敷包みを陽子のリュックの上に乗せて持たせました。そして陽子の真正面に立ち、唾をのみ、息を吸ってから、きちんとした姿勢で向き合いました。

「よく聴いておくれ。今日は昭和22年11月12日。この日かぎりあんたは...
し...死んだんだ！　いいね。享年数え歳二十二。大山陽子は今日、死にました...」

言い終わるなり陽子の両頬を小刻みに震える両手でつつみ、叔母さつきはその額に自分の額をあてて最後の別れをしました。叔母の涙が陽子の目の上をつたって流れおちました。

陽子の心が語ります。

月の出もなく、自分も亡き者となった深夜、私はクスクスの木を見納め、生まれ故郷を見納め、長崎の郷里を出ていきました。もう自分が消えてしまいたいなどと言っていた自分の思いが、こんな形で実現してしまったのでしょうか。その後私は世間からも徳治さんからも身を隠しながら生きていくことになりました。

第7章　解雇

長崎を出てから五年後、重くひきつる身体でもどうにか働けるようになっていた陽子は、名を「ヨリ子」と変えて、熊本県は黒川の温泉宿に、住み込みの下働きとして置いてもら

©ひのめぐみ

っていました。宿の主人の采配で、仕事が終わると温泉に浸からせてもらうことができました。そのお陰か、月日の経過とともに身体の傷も少しずつ癒えていくように見えました。

陽子の心が語ります。

これまでずっと忘れようとしても、気がつくと考えているのは徳治さんのこと。どこでどうしていらっしゃるのか。忘れられるものではありません。けれど、徳治さんを憎んだり恨んだりする気持ちは微塵もないのです。ただ、夫にきちんと仕えることのできない我が身を申し訳なく思うばかりなのです。被爆してから、自分がまともな人間として扱われないことを様々な場面で思い知らされました。そのような私が夫の前に出ていくことはできないと、ただただご迷惑をかけないようにと、それが夫の幸せのため、私にできる唯一のことでした。繊細な徳治さん。病気になっていないだろうか。私の事は構わない。でも自分の夫となった人には、一年でも二年でも生き延びて欲しい...。それは勝手な願いだったかもしれません。その思いは祈りでもなく願いでもなく、私の不安と心配の裏返しだったかもしれません。

「徳治さん　もしまだあなたは　生きてらっしゃる？
あれから五年　かぞえで二十五
名を変えて　居場所を変えて　生きてきた
火傷とたたかい　原子病の数々
徳治さん　どれだけ耐えれば　済むのでしょう

徳治さん　もしまだあなたは　生きてらっしゃる？
あれから五年　かぞえで二十五
重荷には　なること避けて　逃げ隠れ
肉の痛みに　心の痛み
無学の身　あわれな女　嫌われ者

徳治さん　もしまだあなたは　生きてらっしゃる？
あれから五年　会いたい会えない
ピカドンは　私も変えた　生きざまも
人のようには　あつかわれない
わたくしが　あなたを想う　はずかしさ」

時は昭和25年、西暦1950年の8月13日。先代の主人が前の月に亡くなり、その娘の夫があとを継いだばかりでした。その日は立秋の頃の激しい夕立ちがあり、稲光が空と山の合間を横に走りました。陽子は温泉宿の玄関口で掃除をしていました。時々落ちる雷の音は、玄関の戸をガタガタ揺らすほどに轟き渡っています。

©ひのめぐみ

「ひどい夕立だこと。昨日からほとんど降りっぱなし。あらあら、いくら掃除をしても雨が入り込んでくる。ここの掃除はひとまずこれで終わりにしましょう」

陽子が玄関口の掃除をし終わると、新しくなった主人が陽子を呼びました。

「ヨリ子さん、ちょっとこっちへ」

「はーい、なにか」

「悪気はないんだが、あんたの素性が知れてしまったんだ。うちはお客相手の仕事なんでね、申し訳ないが。ほかの連中も、伝染病になったらうちの商いもあがったりだってうるさいんだよ。今日までの給金だ。達者でな」

「え…？　あ、はい…。あ…あの、今日まで置いていただきまして、ありがとうございました」

「ヨリ子さんよ、すまんな。裏口から、みんなに気づかれないように出ていきなさい」

「…はい…」

宿を辞めさせられ裏口を出る陽子でしたが、入れ替わるように、先ほど陽子が掃除をしていた表口から訪ねて来たのがほかでもない徳治でした。差していた黒い雨傘を閉じて細身の徳治が温泉宿の玄関口に入り、主人に尋ねます。

「あのう、もしやこちらに陽子という女性がおりませんか？」

「失礼だが、おたくは誰ですか？」

「申し遅れました。自分は大山徳治といいます。夫であります」

「うちには、いませんよ」

「…そうでしたか。失敬」

裏口の引き戸を閉め終わった陽子が動きを止めます。

「はっ、もしや。あれは徳治さんの声？…似ている」

格子戸の陰から、から傘で身を隠しつつ陽子は声の主を見ようとします。

「あの歩き方。徳治さんに違いないわ！ああ、生きていらした。あの足、痩せ細ってしまわれて。雨でびちょびちょ。でもあれは徳治さんだわ。私はここよ。気づいてくれるかしら…いいえ、だめだめ！　出ていってはだめなの！」

徳治は軒下で雨傘をひろげ、通りに向かって左右を確認しますが、陽子には気づきません。そのまま立ち去ろうとする徳治。何度か声をかけようとするものの、から傘に隠れて陽子は目で追うだけです。

徳治の心と陽子の心の歌が、すれ違いながらも呼応しようとします。

「陽子さん、ああ陽子さん　今どこに　生きているのか、死んでいるのか
　夢にさえ　姿を見せぬ　何故なのか？」

「徳治さん、ああ徳治さん　おゆるしを　こんな陽子を　ゆるしてください
　夢にさえ　出ては行けない　我が決意」

©ひのめぐみ

「陽子さん、ああ陽子さん　なぜ逃げる　覚えているかな　クスクスの木を
今は無い　笑いも声も　君までも」

「徳治さん、ああ徳治さん　お慕わしい　あなたの幸を　願い願いつ
逃げ続け　恋しい人から　逃げ続け」

「陽子さん、ああ陽子さん　今いずこ　君の心も　去ってしまった
とどかない　ぼくの気持ちは　とどかない」

「徳治さん、陽子はここよ　伝えたい　ここにいますと　伝えたいのよ
こんなにも　私の心は　叫んでいます」

「我が妻よ、我が妻、陽子　何故なのか　七夕生まれの　彦星だのに
許されぬ　年に一度の　再会さえも」

「こんなにも　私の心は　叫んでいます」

「とどかない　ぼくの気持ちは　とどかない」

心の声は響きあいつつも、徳治の傘を見送ってしまう陽子の傘。徳治の最後の思いさえ、この日の雨音はかき消してしまうのでした。雨はいつまでも止むことなく二人の心に降り続けました。

第８章　再会

陽子が黒川を去った日の夜は、長崎を去った夜と同じ晦でした。陽子はこの時から初めて、一人で居場所と仕事を求めて転々としなければなりませんでした。終戦してますます食べるものにも着るものにも事欠く日々。素性が知れると追い払われるということを何年も繰り返した末、ようやく福岡の久留米絣の工場に下働きとして雇ってもらいました。陽子、数え歳三十の時でした。ここで「ヨシ子」という名で四十代後半まで働き続けた陽子は、根気の要る括り作業を任されるまでになっていました。

昭和47年、西暦1972年3月。工場の前庭には一本の彼岸桜が立ち、時おり吹く風が門に沿って並び咲くレンギョウの黄色の上に、薄いピンクの花びらを散らしていました。
昼休み、食事を摂り終わった陽子はその桜の木のもとに歩いてきました。それを、福岡にある祖母方の墓参りに来ていた叔母のさつきが見つけたのです。数えで七十七になってい

©ひのめぐみ

たさつきは、祖母ウメを偲んで縁のある久留米絣の工場にも足を延ばしたところでした。さつきは声をかけぬまま、しばらく立ち止まって陽子とおぼしき姿に静かに視線をなげかけました。陽子が気づき視線の先に立っている人を見ると、もちろんすぐにそれが誰であるかを悟りました。二人は驚き、しばらくは言葉になりませんでした。

陽子と叔母さつきは人目を避けて歩み寄ると、抱き合うことなく、しかし固く固く両手を握りしめ合いました。二人が握り合うこぶしは、小さく震えていました。眼と眼をしっかり合わせ続ける二人。ここでは涙を流すことさえはばかられることを無言で伝えあっているかのようでした。ようやく姿勢を正した叔母さつきが、その懐かしい眼差しで陽子をつつみながら口を開きました。

「あなたは今、なんて？」

「ヨシ子です」

「そう、ヨシ子...さん。これまでのこと、お伝えさせてくださいな。徳治さんは終戦後、救護病院であんたを探し当てた。その後居なくなったのは、あんたとの生計を立てるためだったんだよ。発電所の仕事があるというんで宮崎の上椎葉の山奥に入ったまま、あんたへの連絡をつけられずに二年。あんたが長崎を出た後、徳治さんは一度郷里に戻ってきたの。だけど大山陽子は死んだことになっていた。あんたを守りたい一心で亡き者にしたのはこの私だ。あああ、あああ、罪なことをしたよ。」

陽子は両手で顔を覆いました。

「徳治さんはね、その後また県外に働きに出たんだけど、戦後の混乱の中、三年もしたら体を壊してまた長崎に戻ってきてしまったの。あの人も爆心地をそうとう歩き廻ったんでしょう。もともとひ弱なのに。もうそれは痩せ細っちゃってね。わたしゃ、その姿を見たらとうとう嘘をつき通せなくなってしまった。あんたがきっと黒川で生きているだろうって、明かしてしまったのも私なんだよ」

「それで、あの時...」

「黒川で徳治さんと会わなかったの？」

陽子は両手で顔を覆い、頭を横に振るばかりでした。

「徳治さんはね、あんたが生きてるかもしれないと知ったら、それまで床に伏してばかりだったのが、たいして歩けるようになって、遠くまであんたを探しに行ったんだよ。だけど黒川の宿には居なかったといって、その後も熊本から長崎まで心当たりをずいぶん探し廻っていたんだよ」

その場でかたまってしまう陽子。叔母さつきは自分が着ていた久留米がすりの羽織を急いでぬぐと、陽子の肩にかけました。さつきおばちゃんのぬくもりが体に伝わっていきました。

「これはウメさんの着ていた羽織。あんたの父さんの母さんだよ。久留米がすりの問屋の娘だった。この羽織はね、戦時中たとう紙に舞扇とともに箪笥にしまわれていたもの。奇跡的に焼けずに引き出しから出てきたものだから、これは陽子...、ヨシ...、あー、あんたが、あんたが持っててておくれ。ここであんたに会えたのもウメばあちゃんのお引き合わせかもしれないからね」

©ひのめぐみ

陽子は両手の指先で肩にかけられた羽織りの感触をたしかめていました。
昼休み終了の合図がすると、工場のなかで機織りの女子工員が持ち場に戻る足音や、廊下の板のきしむ音が聞こえ始めました。
「最後にこんなこと伝えなくちゃならないなんて。許しておくれよ、陽子ちゃん。徳治さんは、徳治さんはね、もう亡くなったの。数えで三十路に入ったばかりの冬にね。死因は、原子病だ。白血病で...！」

再び真っ直ぐに見つめ合う陽子と叔母の眼と眼。
その時、同僚が探して「ヨシ子さーん」と呼ぶ声がしました。叔母さつきは足早にその場を去りました。

仕事の持ち場に戻った陽子でしたが、黙って進める仕事の手は震え続け、嗚咽を殺そうと噛みしめるくちびるには血がにじんでくるのでした。

第９章　自然

叔母さつきと再会した翌年から、陽子は長崎に再び足を踏み入れ、年に一度クスクスの木のもとに通うことにしました。亡き夫が自分を待っていたという、その場所に。もとの名前のままで。徳治や家族、そして数多の戦死者たちの冥福を祈る為に。
昭和 48 年、西暦 1973 年の 8 月 9 日。陽子数え年四十八歳。薄黄色の日よけ帽子をかぶり、白い日傘をもった喪服姿の陽子が、再びその場所にやってきました。新しくなっているベンチ。新しくなっているバス停。葉の生い茂ったクスクスの木。そこから放たれる蝉の声。陽子はクスクスの木を見上げ、声をかけました。

「クスクスさん！ 徳治さんが、ずっと立っていらした場所。クスクスさん、もう二十年以上会っていなかったのね。ここまで大きく太くなって…。私もここまで大きく太くなってしまったけど！」
陽子は時々ハンカチで汗をぬぐいます。
「よく鳴く蝉さんたちね。子供の頃にはよく土を掘り返して幼虫を探したものねぇ。そしてまた土に戻して。広子ねえちゃんや健四郎がそういうのは得意だった。（蝉に）お前たちはどこから来たの？あの日を生き延びた七代前のご先祖さんはいたのかね？」
陽子はベンチに座り、小扇子を取り出してあおぎ始めました。
「私は昨日でいくつになったかって？もう、かあちゃんが亡くなった齢を越えてしまった。こんな私が、なんで生かしてもらっているんでしょうね。大切な人たちはみんな逝ってしまったのに」

これまで晴れたことのなかった陽子の心でしたが、クスクスさんに会った今日は、一滴の

©ひのめぐみ

安堵のしずくが心の奥にある湖にぽたりと落ちたような気分でした。郷里でどっしりと成長していたクスクスの木を見て、陽子の心は子供の頃に戻っていきました。小さい頃、近所の神社のお祭りの舞台で舞う姉たちの姿を見ていたこと。母がお稽古をつけていたこと。戦争前は夕食後に時々家族で讃美歌や民謡を歌ったこと。その後時代が落ち着いてから、工場の仲間からブギウギやツィストの踊り方を教えてもらったことなどが思い出されてきます。そしてウキウキとした喜びの光が再びほうぼうに飛び散って、陽子の心はうずうずと踊り出したくなってきました。

陽子はとうとうハンカチを振りながら歌いだします。
「クスクスさん？　わからないのよ　どこむいて　生きて行ったら　いいのやらやら？」

クスノキの精が出てきて一緒に歌います。
「クスノキを　見上げてごらん　クスクスクス　あごをあげたら　どこ見てる？」

「いつのまに　クスクスさんは　伸びてたの？　焦げくすぶって　折れていたのに」
陽子が上を見上げながら歌うと、クスノキの精はにっこりしながら応えます。
「くちびるの　かどをあげてよ　クスクスクス　笑ってくれれば　生きた甲斐あり」

こんどは小扇子を振りながら歌い続ける陽子。
「あら、うふふ　クスクスさんは　強いのね　わたしの心は　弱くてだめなの」

クスノキの精がそれに応えます。
「強くもない　弱くもないの　ただここに　立ち続けるの　わたしの姿」

陽子がどうしようもない気持ちを吐露します。
「悲しいの　でもどうしても　笑っちゃう　まだわからない　孤独な私」

クスの木の精はちょっと悲しそうな様子で陽子を見ますが、すぐに明るく答えます。
「ひとりなの？　わたしもひとり　ここにいる　だけど命が　寄ってくるのよ」

それを聞いた陽子は、日傘を振りながらだんだん快活に踊りだします。
みつ蜂も陽子のまわりを元気に飛びながら歌います。
「ぼくがいる　君がいるから　ぼくがいる　ぼくがいるから　きみもいるのさ」

くるくると吹いていた風の精も歌声をあわせます。
「きみの吐く　息や吸う息　息吹き立ち　ぼくらの形も　うまれ出るのさ」

紋白蝶と紋黄蝶もひらひらと陽子に寄ってきます。

©ひのめぐみ

「風の波　きままに任せて　舞い生きる　小さな風でも　地球をめぐる」

花の精が香しい世界をつくりながら歌います。
「絶望を　知る人間に　伝えたい　信じきるだけ　ただそれだけよ」

水の精は陽子に水たまりを見せながら歌います。
「水鏡　あなたのアルバム　映し出し　あなたのなかから　すべてつながる」

ベンチの背にとまっていたハトも陽子の近くに寄ってきます。
「風にのる　いつも友だち　信じてる　ビジョンに向かって　時をつくるよ」

みんなが歌声をあわせました。
「クスクスクス、クスクスさんと　生きてきた
　難しくせず　軽くいこうよ　軽く行こ　　風にのろうよ　軽く行こ

　クスクスクス、クスクスさんと　生きてきた
　難しくせず　軽くいこうよ　軽く行こ　　風にのろうよ　軽く行こ」

陽子の心が語ります。

そういえば、クスクスさんの名づけ親は徳治さんでした。クスクスという音は辛いときでも笑えるきっかけになるだろうって、そう呼び始めてくれたのかもしれません。子供の頃は徳治さんがいたずらっぽくクスクスっていうだけで、おかしくてしかたなくなっちゃって…。こらえようとしても顔を見合わせただけでプーッと吹き出してしまう。そうするともう止まらなくなって、しばらくお腹をかかえて笑い転げていたものでした。ようやくおさまりそうな頃、草の上に転がりながら見ると、クスクスさんの枝や葉っぱがゆらゆら見えて。それがまたクスクスって笑ってるみたいで…（やわらかな笑い声）

第 10 章　邂逅

あれから六十年。時代は変わり、陽子が被爆者であることを堂々と口にできるようになりました。数え年八十になった陽子は今年もクスクスの木のもとに来ました。平成17 年、西暦2005 年の 8 月 9 日、11時。喪服姿の老女が日傘を畳み、 ベンチに作られた木陰に座り、汗を拭きます。時計を見、手をあわせて黙祷します。ところがその後、そのままうとうとと眠りに入ってしまいました。

陽子の心が語ります。

徳治さんが初めて夢に出てきました。私たちはきれいに澄んだ青い湖のふちに離れて

©ひのめぐみ

立っていました。徳治さんは若かりし頃の姿のままでしたので、「私だけこんなおばあちゃんになっちゃって、恥ずかしい」と思いました。徳治さんは黙ってこちらに向いて立っているだけでしたが、気持ちもいきさつもこちらに伝わってきました。徳治さんもやはり被爆されていたのでした。

徳治と陽子は、ゆっくりと歩み寄りました。
「ようやく会ってくれましたね」
「申し訳なく思っております。許して、いただけるのでしょうか。陽子だって、陽子だって、お会いしたかったのでございます」
「許すだなんて、そんなこと。ぼくは怒ってもいないのに」
「こんな私の姿、被爆の後遺症、いくつもの原子病、長年の患い。私のような者には、もったいのうございました、徳治さんは。私のような者には...」
「陽子さん、よろしいか？あなたの見かけや境遇がどのようになったとしても、あなたの真価は、真価は変わらない。あなたがどんなに自分を蔑んだとしても、もともと埋め込まれているあなたの尊厳は、隠しようもなく輝いているのだから」

そのようなことを男の方から言われたことはありませんでしたので、私は心から真っ赤になってしまいました。恥ずかしくて声も出せなくなっていました。

「僕にはね、陽子さん。あなたのそのままの気質。それで十分なんだ。今でも変わらないよ」

私は言葉も出せずにただただ恥ずかしく、黙しておりました。

「もうしばらくすると、あなたもこちらに還ってくるのだよ」
徳治はそう言うと、生きていた時のやさしい声で歌ってくれました。
「内側に　どうか心の　実相に　内なる眼を　むけてください」

そのとき二十代の陽子が現れて、徳治と響きあいます。
「内側に　心をむけて　生きました　自らを裁き　責め尽くすまで」
「思い出そう　よく笑ったね　クスクスと　木は裁かない　誰も責めない」

若い陽子と徳治の心が響き合います。
「内奥の　あなたの心の　宇宙には　ありがとうの海が　広がっている」

若い陽子が歌声を響かせ、徳治がそれに呼応します。
「自らを　怖れ　砦を　築きあげ　まぶしすぎるの　外の世界は」
「忘れたの？　生まれ来るころ　見せ合った　自分が描いた　人生模様」

©ひのめぐみ

「内側で　私の心の　実相で　内なる眼を　開けて見るのね」

ふたたび若い陽子と徳治の心が響き合います。
「内奥の　あなたの心の　宇宙には　ありがとうの海が　広がっている」

徳治がやさしく歌いかけます。
「いつか一緒に　散歩しましょう　二人の道を。」

徳治と陽子がともに響きあいます。
「いつか一緒に、散歩しましょう　二人の道を。」

老女陽子がつぶやきます。
「…二人の道を…。あ、徳治さん…？　徳治さん…？」

陽子の心が語ります。
徳治さんの姿はあっという間に消えていました。どんなにそのまま一緒に行ってしまいたかったことでしょう。もし手をのばしてくれたら、迷わずその手をとって一緒に連れて行ってと頼んでいたことでしょう。

八十歳の陽子が目を覚ましました。
「夢だったの　夢だったのね　消えないで　希望はどれも　打ち砕かれて

諦めの　捨て人生も　生ある限り　どこかで育つの　かすかな希望

言われたい　今度あなたに　会ったとき　もっときれいに　なったね君はと

死後にある　目標だなんて　誰に言う　心の内側　磨きをかけるわ

呪わない　悔やまず愚痴らず　嫉妬せず　さわやかな風を　心に通すわ

卑下しない　悪口言わず　嘘言わず　笑顔とともに　語る言の葉

人の目を　気にするよりは　粛々と　己の魂　澄み渡らせよ

己の魂　澄み渡らせよ」

©ひのめぐみ

第11章　七十回目のこの日

夢の出来事から十年の歳月が過ぎました。戦後70年目の8月8日、陽子は数え歳九十になりました。ここ四～五年ほどは体調を崩し、年に一度の、いつもの場所に足を運ぶことがかないませんでした。そして先頃、老人介護施設に入所したばかりでした。

陽子の誕生日に卒寿を祝う準備をしていた若いボランティアたちは、陽子に直接どんなプレゼントが欲しいか聴きました。プレゼントやお祝いと縁遠い陽子。聴かれたこともない質問に戸惑いましたが、思いきって「クスクスの木に行ってみたい」と伝えました。

陽子の心が語ります。

平成27年、西暦2015年の8月9日。出発の朝、私はいつもの喪服姿に、さつきおばちゃんから頂いた羽織をひざにかけ、車いすに座り、若いボランティアさん5-6名に囲まれていました。この日は海外からの学生ボランティアさんも数名いらっしゃいました。私がクスクスの木の思い出話をすると、彼らは最新型の小さな電磁波機器の何とやらを使って手早く場所を調べ、私のために段差のない道やエレベーターのある駅のホームの場所まで教えてくれました。専用車など頼めぬ私は、公共交通機関を使って夏の長崎を移動しなければならないからです。

一日遅れでしたが、初めて他人さまから自分の誕生日を祝ってもらいました。誕生日カードなんていうしゃれたものをいただき、一人一人から贈り物まで頂戴しました。米国製のハイカラな誕生日カードには英語で「おめでとう」という意味の文字が書かれていることを、若者の一人が丁寧に教えてくれました。

「陽子さん、おめでとうーっ！ハッピーバースデー！」ボランティアさんみんなが祝福してくれました。

「今日のおでかけに合わせて、これ、首がひんやりするネッククーラーですよ」一人の学生ボランティアが言いました。

「八十九才デスね。オメデトウ。ワタシカラはこのアメリカン・ドール。カワいいでしょ？」海外からの学生ボランティア、ルナが金髪の人形を渡しました。

すると日本人学生のボランティア智がルナに説明しました。

「昔の人は数え歳で考えるから、九十歳なんだよ。それで今日、卒寿のお祝いなんだから。さてと、これは富士山ラベルの美味しいお水。」

「コレネ、UVカットの手袋デス。紫外線対策ネ」豪州から来ていたボランティアが自分で手袋をはめて陽子に見せてくれました。

「ワタシからは日よけ帽子、似合いますヨ」インドネシアからのボランティアさんが陽子の頭に帽子を乗っけてくれました。

「コレはガーゼのハンカチーフ。肌にやさしいデスよ。ここはワタシが刺繍しました」フィリピンからのボランティアさんは自分で刺繍したところを見せながら、ハンカチを渡してくれました。

©ひのめぐみ

介護士さんが思いついたようにポシェットから小さいものを取り出しました。
「陽子さん、私の口紅で悪いけど、ちょっとつけて行きませんか?」
「あら、いいわね～。美人になったこと。ゆっくり遊んでらっしゃいね」これを見ていた主任さんが笑顔で陽子を送り出しました。

陽子の心が語ります。
それはそれは、まるで秘密の蔵の中に積み上げてあった贈り物を一遍に届けられたかのような日でした。口に紅をさして、真新しいものに身を包まれている私。素直な喜び方を忘れていた私は、若い人たちからの無邪気なはちきれんばかりの祝福のエネルギーを恐る恐る、でも少しずつ素直に、内面に浸み渡らせていきました。明るく新しい感情の直撃を受けて、私の心の城壁がやさしく崩されていくようでした。若人が押してくれる車いすに身を委ね、がたがた道でもなめらかな道でも、私は身も心もなすがままになっていました。
尽き果てそうになったときに味わう一瞬の歓喜のために、長い長い泥沼を這うような人生の時間はあるのかもしれません。

街路樹から放たれる蝉の声。「平和を願う広場」の看板近くでクスクスの木を探すボランティアさん二名と車いすの陽子の姿がありました。

智がキョロキョロしながら言いました。
「おかしいなあー、絶対この辺にあるはずなんだけど。調べてみるよ」
「ヨーコさん、クスクスの木のありかは正しいデスか？」ルナが聞きました。
「ええと、バス停があそこで、クスクスの木がここいらにあるはずなのよ」陽子が一生懸命、記憶をたぐりよせています。
「イイデスか？駅はあっち、バス停はこっち。ベンチ？無いデスね。木はあっちにもこっちにもあるケド、どれがクスクス？立派な道しかありませんネ」
「私もとうとうボケちゃったのかねぇ。戦時中に姿の変わり果てたクスクスさんでも、当時は見分けがついたもんだけどねぇ」
「もう長いこと経ちマシタから、記憶は間違っているかもシレマセンネ」
智がつぶやきました。
「んー、分かったよ」
「どうデシタか？」
「ここ一帯が、四～五年前から開発されてて、いろんなものが取り壊されちゃったらしいんだ」
「そうデスか、それでは分からないネ」
「それじゃあ、あのクスクスさんも？」車椅子の陽子がつぶやきます。
「うーん、どこかに残ってないかなぁ。何か少しでも手がかりになるものありませんか？」
「あぁ…あそこ。防空壕の跡。私が入ったことのある防空壕の跡だよ、あれは。防空壕の

©ひのめぐみ

中からだとね、クスクスさんが、まるで敵の前に立ちはだかってくれてるように見えるのよ」
「ソレデハ、クスクスの木は、ここにあったのデスね」

陽子の心が語ります。

ボランティアさんは、どこにあるのか分からないくらい小さな電磁波機器とやらで手早く調べてくださっていましたが、こんどは自分の手のひらに情報を写し出して私に見せながら話してくれました。

「ここに『平和を願う広場』っていうのを作って、平和学習用の施設にするために、この辺の古い木が切られちゃったみたいなんですよ」
智がそう言い終わると、二人は車いすの横に黙って立ちました。陽子は、かなり気落ちしている様子です。

「陽子さん、ごめんね。もっとよく調べておけばよかったね」
「残念デスね」
「…いえいえ、ここに連れてきてもらっただけでもありがたいことです。何時かしら？もうすぐ 11 時 2 分だわ。クスクスさんの分も、一緒に黙とうを捧げましょう」
全員で黙とうを捧げます。

「黙祷終わり」智が言うと、三名とも黙祷を終わりました。
すると陽子は二人のボランティアさんに向かって、言いました。
「済まないんだけど、一つお願いをしていいかね」
「モチロン、今日は何でもおっしゃってクダサイ」ルナが返しました。
「じゃあ甘えさせてもらいますよ。夜、もう一度ここに寄ってくださる？一人でここに居てみたいの。どうぞお願いします」陽子は合掌して二人に頼みました。

「ごめんなさい！先約が入ってる！ルナは大丈夫？」
「ノープロブレム、サトシ。ワタシ一人でダイジョーブ」
ルナがにっこりして陽子を覗き込みます。陽子がその目を見て言いました。
「そういえば昔、あなたがくださったような青い目のお人形をもってたわ。米国の学校から送られてきたものだと聞きましたよ」
「ワオ！ウレシイデス」
「姉の学校からも、日本人形をあなたの国に送ったそうですよ」
「ワタシはアメリカから来マシタけど、私のグランマ日本の人、グランパがアメリカの人デス。ワタシのパパはロシアの人。ワタシはルプツォフスクにイマシタ。それからママは離婚シマシタ。二回目のワタシのパパはドイツの人。ワタシはケールに住みマシタ。一人になったアメリカのグランパが寂しがりマスから、今はサンディエゴで一緒に暮らしてイマス」

©ひのめぐみ

「まぁー、国際的だわね。どこがどこやらよく分からないけど」
「えっと、アメリカも、ロシアも、ドイツも、ワタシのフルサト。それにここ、ニホンもネ」
「そうなのねえ。まぁ、それは素晴らしいこと」
智は去り、ルナは車いすを押し、陽子と色々話しながらその場を離れました。
米国から来たもう一人のボランティアさん、ルナが陽子とその後一日を過ごすことになりました。

第 12 章　お月さま

鈴虫の音の響く夜。「平和を願う広場」の看板前にルナが陽子の車いすを押しながらやってきました。車いすをとめると、陽子と一言二言話し、ルナはそこから離れて行きました。近くに立っている街灯が、陽子の羽織姿を照らしていました。
しばらくすると、じっと座っていた陽子の片方の目から涙がつーっと流れていきました。もう片方の目からも涙のつぶが出てくるのに任せると、抑えていた思いが次々とあふれ出てくるのでした。
「だけど…　どうして…。どうしてですか。クスクスさん。あなたまで。また私は、私は一人ぼっちですか？　何故クスクスさんまで先に逝ってしまうの？木は人よりずっと生きるんでしょう!?　何百年だって生きるでしょう！何故…　なぜ！　なぜ！」

一人むせび泣く陽子の影を、街灯がアスファルトの路上に映します。　月の出を待っていた陽子ですが、なかなか月は現れません。

しばらくすると、ルナが戻ってきました。
「ヨーコさん、もう帰りマスか？」

陽子は帰り支度をはじめる素振りをしながら、伝えます。
「そうね。だけど、お月さまがまだ出ていらっしゃらないの。拝ましてもらいたいわ」
「月を見たいのデスか？じゃ、もっと待っていまショーネ」
「すまないねぇ。ありがたいこと」
陽子がごそごそと巾着を取り出し、中の金平糖を口にほおばります。残りを巾着ごとルナに差し出し、食べるよう促しました。
「ほら、これ金平糖っていうの。どうぞ」
「コンペイトウ？　ワォ！　甘いネ。おいしいデス！　サンキュー！」
「あなた位の兵隊さんがね、これを持って戦地に行ったのよ」

ルナは防空壕上部の土手に座ると、笛のような音を奏で始めました。一日中の外出でく

©ひのめぐみ

たくたになった陽子は、とうとう寝入ってしまいました。陽子は車いすの上で、ルナは土手で、まどろんでいます。

陽子の心が語ります。

思い返せば、故郷を出てからというもの、何も信じられなくなったときでも、誰にも話せない心のうちを語りかけていたのがお月様でした。とはいえ満月はまぶしすぎました。朔に生まれた私は、漆黒の闇の向こうにいらっしゃるであろうお月様を思い描いては、話しかけていたものです。子供の頃に読んだ絵本の中に描かれていた半月よりも少し細くて、三日月よりも少し太い、私の好きなお月様。そしてそのゆりかごみたいなお月様に私は腰かけている。絵本の中のように、お月様はちゃんと聞いていてくださる、そう信じていたのでした。

月の光の精たちがゆっくり現れると、静かに舞い始めました。そこへ二十代の姿の陽子が現れます。夜半をしばらく過ぎてからようやく現れた有明月は、半月よりも少し細めの、陽子の好きな月のお姿でした。二十代の姿の陽子が月と歌の響きあいを始めます。

「お月さま　あれは天罰　だったのですか　人は罪の子　だったのですか
　お月さま　こたえておくれ　せつなき光　包んでおくれ　静けき光」

月の精の声がします。

「わたくしに　声かけるもの　さあお聴き　浄けき世界に　裁き無かりき」

月の精に心が響くまで、若い陽子は問いかけ、月は返します。

「お月さま？…　ああ、お月さま　お願いよ　母ちゃんのとこ　連れてって」
「命の綱　みずから切ること　決してあたわず　いただいた命　永遠に生かしめ」
「何故ですか　助けてくれない　何故ですか　たった一人で　苦しんだとき」
「月は母　命の母よ　あなたの母　ともに泣かずに　おられましょうか」
「悪い子だから　罰したの？」
「誰が我が子を　罰したかろう」

月の光の精たちが現れて一緒に伝えます。

「悪い子などは　あるはずもなく　産みだされしは　愛しき子ばかり」
「じゃあ何故に、なぜ、なぜ、なぜ？　死にきることも　できない私
生ききることも　できない私。」

月の光の精たちが歌いつづけます。

「こらしめは　天も自然も　いたしません　映し出すだけ　心のなかを」

「心のなかを？」陽子は胸に手をあてます。

©ひのめぐみ

月の光の精と花の精が歌いかけます。
「みずからの　心の内なる　光呼び　ただただ光　輝かしめよ」
「心の内なる光…」陽子が何かを感じようとしています。

月の光の精、花の精、クスノキの精がともに伝えます。
「自由なる　意志を授けて　永遠に　生かしめんとす　深き思いを」
「罪深き…子にも…？」

風の精もやってきて、ともに伝えます。
「罪の子は　どこにもいない　ダメな子も　愛しき子ばかり　あなたも愛し子」
「わたくしが？　信じられない！　わたくしなんか　ダメな人間　だと信じ切り…」

水の精も彼らとともに伝えます。
「ダメな子は　どこにも居らぬ　心から　見守られませ　救われませよ
　どの子とて　どんな子だとて　産みだされ　育まれませ　救われませよ」

しかし陽子は驚いたように言います。
「嘘だうそ　私はなにも　知りません　何故こんな目に　遭わせるの　天は
　ただの月　あなたはどうせ　ただの月　何もできない　何も知らない」

月の精の声が静かにそれに応えます。
「それでよい　我ただの月で　あってもよい　ただ見守りて　待つことの行」

若かりし姿の陽子は、一瞬はっとします。
「ごめんなさい　信じぬこころ　ごめんなさい　朔に有る月　信じるこころ」

月の精の声が続きます。
「暗闇は　光差す間の　一歩前　朔に新月　開かれゆく窓」

再び陽子は月に響くまで自分の心に問いかけ、月と呼応します。
「なにもかも　分からなかった　なにもかも　ただもがいては　懊悩の日々」
「救いたき　子に送る手を　はねのけて　苦しみの淵に　落ちる子ばかり」

「そんなこと　するはずもなし　どれほどに　待ち焦がれたか　救いの手をば」
「秘められし　思いの力に　気づかねば　光蹴散らし　窓閉じる子ら」

陽子が上をむいて月にまっすぐ伝えます。
「自らも　気づかぬ心の　奥底に　ありし思いを　今いざ見んとす」

©ひのめぐみ

月の精の声が応えます。
「勇気もち　前に進むと　自らの　決意ありての　今のこの時」

「見ぬ振りと　どうどう廻りの　わがおもい　断ち切り　跳びて　向かう満月」
陽子がこう言い終わると眠っていた老女陽子が目を覚まし、月が語るのを共に聴きました。
「受け入れよ　送り続けし　我が光　心の膳に　受ける杯あり」
この月からの言葉を、老女陽子が一度受け止めました。
「求めなば　内なる真我　七十かけ　再会ありとは　真の言の葉」

無意識に月にむかって目を輝かせて応えた老女陽子でしたが、ふと我に返ると、下をむき、頭をふりながらつぶやきます。
「むだ死にを　させられし者は　いかばかり　誰も無駄には　死にたくなかろ」

すると月の精の声が響きます。
「人の世に　見えなきことの　多かれど　むだ死になど無し　どの一人にも
天は救わん　どの一人をも」

そしてクスノキの精と土の精が進み出てきました。
「自らの　振る舞い無くも　同じ人　人を人とて　もてあそぶとき
科学の粋　自由意志とて　許されず　同じく人が　それをこうむる
かの土地の　民進み出で　引き受けし　個の業超えて　人類の業」

月の精の声が返ってきます。
「人間の　悟らぬ性よ　安寧の　続く御代には　こと無きうちは
尊きは　汝が肉体　差し出しつ　あまたの御霊　救う学びぞ」

クスノキの精と土の精が精いっぱい伝えます。
「土台下　平和の道を　ささえつつ　汝が精神　齢重ねて
靴裏で　踏まれし揉まれし　その生の　みじめなこと無し　勇気あれかし」

風の精と水の精が呼応しあいながら伝えます。
「勇気ある　魂もちて　進み出で　決意し時を　思い出すらむ」

ふたたび月の精の声が響きます。
「みなさまは　勇気をふるい　人類の　因果応報　身に背負いつつ」

©ひのめぐみ

クスノキの精と土の精の透明な声が大地に響きわたります。
「腸に　慟哭懊悩　おさめつつ　恨みに恨みを　返すことせず
　怒りに怒りを　返すことせず」

花の精がよき香りを振りまきながら可憐に舞います。
「よすがなり　この世の病みを　日花里まで　転じさせます　強き心は
　ありがたきかな　ありがたきかな」

クスノキの精と土の精とともに、風の精が力強く出てきます。
「身内とて　国とて引き裂き　死にすれば　あまたの人間　憤怒の念満ち
　敵とみたてて　心許さぬ
　その思い　その思いをば　食わんとす　やみの病巣　食いとめし」

クスノキの精と土の精の姿がすっくと立ったように見えました。
「土の下　何千回もの爆発音　沈黙のなかに　地球の叫び
　一発の　プルトニウム型　爆弾の　前と後にも　犠牲者の影」

月の光の精、花の精、水の精がうつくしく詠います。
「見えずとも　すべての御霊　われら知る　癒されませよ　救われませよ
　気づかれず　消滅せしも　われら知る　感謝とともに　救われませよ」

精霊たち一同がこころ合わせて詠います。
「悲しみも　迷いも今宵　かぎりにて　祝いや祝い　いざ舞い踊らん」

若い陽子と老女陽子が驚くように問いかけます。
「わたくしも、その地に住まう者の一人と？」
「わたくしも、その業を背負う決意をした者の一人と？」

月の精の声が再度響き渡ります。
「もうご自分を責めないでください。あなたは、あなたがたは、みじめな魂などではないどころか、勇気ある魂なのです」
「本当ですか？」
「本当ですか？お月さま」
「そうです。そして憎悪や怨念を放つことなく赦しを超えた心は、憎悪のさらなる核分裂を抑えました。しかし一発の原子爆弾の陰にある犠牲者はあなたがたのみならず、その後も繰り返される核実験はこの地球の肉体をむしばんできました。それでも地球は怒りなどしない。人間が起こした愚行を人間が蒙る姿を涙で受けとめながら耐えていらっしゃるのですよ。」

©ひのめぐみ

「はい….。はい…。ありがたいことでございます。ううう。」老女陽子は嗚咽をこらえながら大地にひれ伏しました。

「どうか代々に憎しみを伝えるのではなく、赦しを伝えてください。そして平和と繁栄の道へと転じるよすがとなってください」

「ああ、ありがとうございます。憎しみを伝えるのは、私の代で終わらせます。」若い陽子は月の光のなかで、自分でありながら自分を超えたところから、自らの声が発せられるのを聴きました。

懺悔と感謝の涙が陽子の目からあふれ出ました。若い陽子と老女陽子ともに泣き、しばらく抱き合って一つに和していきました。

月の光の精たちが居住まいを正しました。すると月の精が音もなく空に姿を現し、舞い始めるのでした。

「十八の旅　旅路ながしと　思えども　それ一天に　集まりし点
　ひふみよ　いむなや　ここのとお

　見ゆるかな　かくれし父母は　見えねども　美　宇に隠せり　宙に隠せり
　ひふみよ　いむなや　ここのとお

　うるわしき　天界の門　開かれて　いざ還りつく　御霊のふるさと
　ひふみよ　いむなや　ここのとお」

月の精は舞い終わり、月の光の精たちとともに消えました。

第13章　有明月（ありあけのつき）

陽子の心が語ります。

わたくしはこの日、初めて心から泣くことができました。目からは涙を超えたものが溢れだしました。やわらかなお月さまの光が心の内側まで差し込んで、こんがらがっていた何本もの光の糸を解きほぐし、櫛で真っ直ぐ梳かすかのように、自分の心が向かうべき方向に流してくれたようでした。その心は、悲愴感や悲しみというものではなく、何か違うなつかしい力に突き動かされて、涙の一粒一粒が過去の歪んだレンズを溶かし出し、眼の窓から外へ押し出してくれているようでした。

老女陽子が、泣き腫らした目と鼻にかかった声でありながら、せいせいとして呟きます。

「泣いた泣いた、大いに泣いたわ！」

しかしふと、握りしめていたハンカチを見てあわてます。

©ひのめぐみ

「プ、プレゼントのハンカチが、こんな涙で濡れてしまう。 大変、大変。ええっと、こういう時は深呼吸、深呼吸！」
老女陽子は深呼吸します。周りにいる精霊たちと若い陽子も、深呼吸の真似をしています。

「それから、ええーっと。反対側向いてみるといいってきいたわ。悪運を切り良運を得る！」
老女陽子が反対側に向きます。周りの精霊たちと若い陽子も、真似して反対側をくるりと向いています。

若い陽子が明るい声で言います。
「クスクスさんの名前を思い出すと、どうしてもクスクス笑ってたことを思い出しちゃうわ。不真面目な陽子。あー、こんなに嘆いているのに、もう一人の陽子はクスクス笑いだしそう」

老女陽子も呼応します。
「ほんと、可笑しいわ。もう笑いたいときには笑っちゃいましょうよ」
若い陽子が呼応します。
「ほんと、もう泣きたいときには泣いちゃいましょうよ」

精霊たちが、二人の周りに徐々に集まってきて、あたりが明るくなってきました。
クスノキの精が呼びかけます。
「今だよ、陽子。ダンス、するんだ！」
若い陽子が元気に応えます。
「よし！こうなったら、どんどんいくわよ！」
若い陽子は、老女陽子の傘を手にすると、快活に踊り始めます。生き物や精霊たちも一緒に歌い、踊りだしました。

「大声あげて　泣いてもいいよ
眼から涙を　流していいよ
心の内から　晴らしていこう
心の内から　涙をつくろう

大声あげて　泣いてもいいよ
眼から涙を　流していいよ
心の内から　晴らしていこう
心の内から　涙をつくろう」

老女陽子の手をとる若い陽子。うなずいて車いすから立ち上がり、進み出る老女陽子。若

©ひのめぐみ

い陽子、老女陽子、ともに踊りあいます。これまで出会ったみんなが次々と現れて、一緒に踊り始めます。

「涙はなんでも　流してくれる
腫れた目のまま　鏡をみたら
クスクス　クスクス　クスックス

流しちゃおうよね　昨日の事は
流しちゃおうよね　さっきの事は
流しちゃおうよね　一秒前まで
いつでも　ゼロから　スタートOK！

もうそろそろそろ　気づけよ気づけ
詰まった鼻だよ　鏡をみたら
クスクス　クスクス　クスックス

笑っちゃおうよ　一秒後の事
笑っちゃおうよ　今日みる夢を
笑っちゃおうよ　明日の発見
いつでも　ゼロから　スタートOK！

生ききろうよね　いただく命
死にきろうよね　生ききる命
なんにも　なにも　迷うことなく

目覚めたんだよ　もとの命に
還れるんだよ　もとの命に
愛の光に　つつまれながら

もう何であれ　わたしの光を　さえぎるものは　ないんだよ
戻っていくよ　すべてのものは　もとの姿に　美しく

だれもがみんな　家族というけど
宇宙がまるごと　家族家族
クスクス　クスクス　クスックス

踊っちゃおうか　ほら、あご上げて
踊っちゃおうか　クスクス見上げ

©ひのめぐみ

踊っちゃおうか　口角あげて
いつでも　ゼロから　スタートOK！

いつでも　ゼロから　スタート　OK！
いつでも　ゼロから　スタート　OK！」

歌が止みました。みんなが消え、老女陽子とルナだけが残りました。陽子は車いすに座り、ルナは防空壕の上の土手にいます。ルナが、夜明けの空に消えかかっている有明月を見つけました。

ルナが空の月を指して言います。
「ヨーコさん、あそこ！」

陽子が明るい目をしながらルナに答えます。
「ほんと。今日はわたしの大好きなお姿の、お月さまね」

老女陽子が空の月に伝えます。
「お月さまに、ありがとう
空からお心　響いてきます

いっしょにいますよ　かならずと
見えなかろうとも　一緒よと

ああ、私は生きている
いま、ここに、いる

かあさん、ありがとう、ごめんね
かあちゃん、ありがとう、ごめんね」

陽子の心が語ります。
私は、それがどんなことであろうと、私自身の深い処で引き受けた人生なのであれば、これを生ききろうと決心いたしました。遅すぎる決心であるとは、もう思いますまい。どの人も、「今」「ここに」居るということに、必ず意味があるのだと思えるからでございます。
戦後七十年経ち、今日初めて、生きさせていただいていることに感謝できました。あたりまえに見える毎日があるということが、深い、深い恵みでございます。
これからも様々に出て来るでありましょう新しい技術、どんなものにも表と裏がございましょう。どちらを引き出すか、どちらの世界で生きるかは、それに関わる者の思い次第。
これからの私は、外からのあらゆる括りと縛りを超えて、自らのなかに作りだす思い

©ひのめぐみ

と言葉の力を、大切に、大切にしていきたいと思うのでございます。自らのなかの「思い」と「言葉」。その力。平かな世に近づくには、それが最も遠く見えて最も近い道であると、九十年生きて参りましてようやく、そのような思いにたどり着いたのでございます。

木々の間から鳥たちのさえずりが聞こえ始めました。白々と明けて行く空に浮かぶ月を土手からじっと見つめるルナ。早朝の「平和を願う広場」の奥から、若者たちのハーモニーが聞こえてきます。陽子はゆっくりと合掌しました。

終

©ひのめぐみ

†††††††　†　†††　†††††　†††††††　　†　　†††††††　†††††　†††　†　†††††††

「わるい子だから　罰したの？」
「だれが我が子を　罰したかろう」

大東亜戦争の末期、1945 年 8 月長崎。

つつましやかに暮らす 18才の少女　-　白水陽子は、出征間近の徳治と祝言をあげた。

それから数日後、8 月 9 日。長崎に原爆投下。陽子は、奇跡的に一命をとりとめるものの、被爆の後遺症を患うこととなる。大切な家族も失い、夫とも生き別れた。これまでの名も人格までも失い、新しい名前で新しい人生を一人で生きていくことになる。

「天罰だったのですか」
陽子はそう心に問いながら、生きつづけた。
そんな陽子の心の支えとなっていたのは　-　月。

「憎しみを伝えるのではなく、赦しを伝えてください」

戦後70 年、日本から赦しの心を伝えたい物語。

†††††††　†　†††　†††††　†††††††　　†　　†††††††　†††††　†††　†　†††††††

『クスクスの木の物語』の英語編、朗読劇・舞台劇（オペレッタ）用のシナリオは
以下の URL からダウンロードできます

HP　http://kuskusnoki.web.fc2.com/
Mail　hanaelici@m9.dion.ne.jp

©ひのめぐみ